

P-41.

骨髄移植前後における患者の心理状態と  
精神科治療について  
—コンサルテーション・リエゾン・サービスの観点から—

(精神医学教室) ○富澤治 堀越美重 八巻蔵人  
樁雅志 鈴木恵美 平林直次  
飯森真喜雄 清水宗夫

白血病および悪性リンパ腫は予後不良の疾患であり、現時点では骨髄移植(Bone Marrow Transplantation以下BMTと略)が最も根治的な治療法とされている。これらの疾患は多彩で重篤な症状を呈し、またその治療法である化学療法、放射線療法も様々な強い副作用、合併症を伴う。このような状況の中で患者が受ける身体的、精神的な負担は強く、精神症状を呈することもまれではない。BMTはこのような過酷な疾病、治療の状況を根本的に解決する方法として患者に大きな期待を抱かせる治療法である。しかし一方では無菌室に隔離されたり、様々な合併症を伴うこともあるという点でBMT自体が大きな心理的負担ともなり得る。我々はリエゾン精神医学の立場から当院内科においてBMTを受ける患者の治療を行っているが今回これらの治療経過について①BMTに対して期待と不安を伴う前BMT期、②無菌室での孤独な状況におかれるBMT期、③再発、移植片宿主拒絶反応(GVHD)、感染の危険性もはらんだ後BMT期、の3期に分けて症例の精神状態を評価した。対象は平成6年4月1日から平成8年11月30日までの間に当院でBMTを施行した36例(うち生存21例死亡15例)中、当科に依頼のあった7症例(男性3例、女性4例)で、発症時平均年齢30.57歳、平均1091日後の転帰は死亡5例、加療中2例であった。精神障害に関しては前述の病期分類で②③期に気分障害を呈した例が3例、①③期に解離性、転換性の症状を呈した例が1例、軽度の不眠と不安を呈したものの、精神医学的診断としては特定の疾患に該当しないと思われた例が3例であった。

これらの症例を検討したところ発症前の患者の性格特性や問題解決に際しての反応パターンに加え、白血病、悪性リンパ腫といった重篤な疾患に罹患したという事実に対する心理的な負担、これらの疾患に対する様々な治療、特に化学療法(特にステロイド)の及ぼす向精神作用などが影響しているように思われた。

P-42.

## 多彩なアテローム硬化を呈した一例とその画像所見

(老年科)○小山哲央, 久保秀樹, 宇野雅宣,  
赤沢麻美, 小泉純子, 杉山 壮,  
岩本俊彦, 高崎 優  
(第二外科)石丸 新

緒言: 近年, 食生活の欧米化に伴い, アテローム硬化による臓器障害が増加している。一方, 画像診断の進歩はめざましく, 動脈病変を非侵襲的に検出することも可能となった。今回, 高度の動脈硬化が多発した一例を経験したので, その画像を供覧し, 病変の成り立ちを考察した。

症例: 74歳, 男性。既往に閉塞性動脈硬化症, 胸部大動脈瘤(以下TAA), 腹部大動脈瘤(以下AAA), 心筋梗塞があり, 平成2年左浅大腿動脈99%狭窄にてバルーン拡張術施行。血管撮影にて, 胸部下行大動脈および腹部大動脈の著しい壁不整及び拡張を認め, TAA, AAAと診断。AAAに対して人工血管置換術(Y字グラフト)施行。腹部大動脈の組織学的検索では, 中膜萎縮に加え多量のコレステリン沈着, 小円形細胞浸潤, 新生血管の増生を認め, 血栓形成を伴うアテローム硬化がみられた。また, 心カテーテル検査にて, RCA #1: 90%狭窄, LAD #6: 90%, #7~8: 75%, #9: 95%, #13~15: 75%狭窄を認め, その後平成6年, 心筋梗塞をきたす。

平成8年, 肺炎をきたして入院。痴呆症状, てんかん発作, 嚥下障害を認めた。頭部MRIにて, PVH, 小梗塞の多発がみられ, 頭部3D-CTは左椎骨動脈より脳底動脈全般に至る紡錘状の動脈瘤を示した。また, 頸部超音波検査でも, 頸動脈の拡張およびアテロームプラークを認めた。

結語: 本例は種々の画像検査より, 大動脈, 冠動脈, 下肢末梢動脈および頭頸部動脈に高度のアテローム硬化病変を認めた。病変は, 狭窄像ばかりでなく拡張像としても観察され, 血管壁リモデリングが多彩であることを示していた。